

## 明治 5 (1872) 年の独和辞典 —八戸学院図書館旧蔵 『亭和袖珍字書』 覚え書き—

小澤 昭夫

### 目次

1. はじめに
2. 日本で最初の独和辞典
3. japanesisch と japanisch
4. 東京は Tokei
5. 『亭和袖珍字書』と『和譯獨逸辞典』の編者、出版元など
6. 訳語と語義について
7. 結びにかえて

### 1. はじめに

『亭和袖珍字書』という辞典がある。出版は明治 5 (1872) 年である。ただし、手元にあるのは三修社による 1981 年の復刻版である。

この辞典の和文のタイトルページには、縦に三行に分けて「明治壬申仲秋新鐫」「亭和袖珍字書」「東京 學半社蔵」と書かれている。また欧文のタイトルページには次のように記されている。なお、引用文の中の改行は「 / 」で示すことにする。(図 1、2 参照)

Deutsch-Japanesisches / Taschenwörterbuch / zum Gebrauche / Der deutsch lernenden japanesischen / Jugend wie der, der japanesischen / Schrift und Sprache / Kundigen. / verfaßt von / S. Oda, S. Fudjii, Iu. Sakurai. / Tokei / Gedruckt / in der Kurata Buchdruckerei, im 5<sup>ten</sup> Jahre Meidji. / 1872.

つまりこれは"Deutsch-Japanesisches Taschenwörterbuch"とあるように、歴とした独和辞典であり、上に引用したドイツ語の原文はドイツ文字の活字体によるものである。それにしても、「亭和」の「亭」、japanesisch、Tokei などの表記に興味を覚えるのは筆者だけではあるまい。これらの点について調べてみたところを、以下に書き留めておきたい。

### 2. 日本で最初の独和辞典

明治 5 (1872) 年は、日本で最初の独和辞典が出版された年である。この年に出版された独和辞典がもう一冊手元にある。『和譯獨逸辞典』という。ただし、これも 1981 年の三修社による復刻版である。タイトルページには「明治五壬申歳 / 孟冬新鐫 / 和譯獨逸辞典 / 春風社合著」と崩し字で書かれている<sup>1)</sup>。ドイツ語のタイトルは次の通りである。(図 3, 4 参照)

Handwörterbuch / der / Deutschen Sprache / für / Japaner / Nebst gebräuchlichsten Fremdwörtern, Mit / einem Verzeichnisse der Unregelmässigen / Zeitwörter. / Zum Gebrauch fuer alle / Staende. / Erste Stereotyp-Ausgabe / Tokei / Verlag von Kwankorio / Funftes Jahr Meidchi.

明治 5 年には更にもう一冊の独和辞典『袖珍亭語訳囊』（「玠」は「珍」の異体字）が長崎で出版されているが、こちらは未見である。田中梅吉『日独言語文化交流史』にこの辞典のタイト

ルページの写真版が掲載されているので<sup>2)</sup>、そのドイツ語を書き写すと次の通りである。

DEUTSCH-JAPANISCHES / TASCHENWORTERBUCH. / ZUM GEBRAUCHE /  
für / SCHULER, KUNSTLER, REISENDE / UND AUSWANDERER. / ERSTE  
DRUCK. / NAGASAKI: / FUNFTE JAHR MEIDI.

この書名では、für 一上記の2行目の先頭に見える一だけが小文字で、他の語には大文字が使われているが、変母音を示す符号「:」はない。因みに、"ERSTE DRUCK"と"FUNFTE JAHR"は筆者の転記ミスではない。

これら三種の辞典の出版時期を見ると、『孝和袖珍字書』仲秋(陰暦8月)、『袖珍孝語訳囊』9月<sup>3)</sup>、『和譯獨逸辞典』孟冬(陰暦10月)で、相前後して刊行されていたわけである。

さて書名に現れる「孝和」「孝語」の「孝」である。

外国語の辞書の場合、「羅和」「英和」「独和」「仏和」「伊和」「露和」の如く、「和」の前には言語名(あるいは国名)がつくのが一般的と思われるが、この「孝和」「孝語」の「孝」とは何か。

この疑問は、鈴木重貞『ドイツ語の伝来—日本独逸学史研究—』の記述によって氷解した。

「孝和の孝は、<sup>フワ</sup>孝漏生の<sup>フロイゼン</sup>孝であり、ドイツ帝国成立直後であったから、プロシアとドイツは混同して用いられた」(87頁)

オイレンブルク伯(Friedrich Graf zu Eulenburg)を首班とするプロイセンの東洋遠征艦隊が初めて日本を訪れ、幕府がプロイセンと修好通商条約を締結したのは、万延元年12月14日(西洋暦1861年1月24日)のことである。

鈴木(同書44頁)によれば、この条約の第二十一条には

「<sup>フロイゼン</sup>孝漏生国のチプロマチーキアгент及びコンシュライル吏人より日本司人にいたす公事の書通は、独逸語を以て書すべし尤此条約施行の時より五箇年の間は日本語又は和蘭語の訳文を添ゆべし」

とあり、今までの外交用語はオランダ語であったが、日本側は5年後に備えてドイツ語学習の必要に迫られていたとのことである。

前述のように、『孝和袖珍字書』の刊行は1872年であり、この間にプロイセンは普墺戦争(1866年)、普仏戦争(1870-71)に勝利し、プロイセンを盟主としてドイツ帝国が成立(1871年)していたのである。

プロイセンまたはプロシアは、「普魯西」と書かれることが多いようであるが(『日本国語大辞典』など多数)、この他に「孝漏生」、「孝魯士」、「孝露西」などと宛字されたとのことである<sup>4)</sup>。

インターネットで「袖珍字書」を検索してみると、この『孝和袖珍字書』がヒットするのだが、その読み方には、「fuwa shūchin jisho」(早稲田大学図書館)の他、「ボツワシュウチンジシヨ」(東京外国語大学附属図書館 OPAC)、「ハイワシュウチンジシヨ」(国会図書館デジタルコレクション)、「はいわしゅうちんじしよ」(名古屋市の某古書店)などが見られる。

宛字であれば詮無きことではあるが、諸橋『大漢和辞典』によれば「孝」(3巻824-5頁、子部四画)の音は、

㊦ ヒ ㊧ ハイ/パイ ㊨ ホツ/ボチ ㊩ フツ/フチ ㊪ ボツ

である。「ボツワ」「はいわ」という読み方はこの音に従ったものと推測される。

田中梅吉『日独言語文化交流史』には、「明治2年(11月11日)—明治3年(11月20日)」

の出来事の一つとして「長崎市外務課の帳簿は、本年から『孝』字を『獨』字に改める」(482頁)と記されている。この事項は、当該期間の末尾に現れるので、「本年」は明治3年のこととなるが、『孝和袖珍字書』刊行の2年前には既に「孝」を「獨」に改めるような動きもあったわけである。

### 3. japanesisch と japanisch

japanesisch が japanisch と同じであることは、容易に推測できる。比較的新しい辞書にこの語が取り上げられることはまずないと思われるが、相良守峯編『大独和辞典』(博友社)には、**Japaner** に続いて次のように記されている。

**Japaner** m. -s, -, 日本人.

**Japanese** † m. -n, -n, 同上.

**japanesisch** † a. → **japanisch**.

「†」の記号が示すように、**Japanese** も **japanesisch** も「古語」の扱いである。

また『独和大辞典』(小学館)には、

**Japanese** 男 -n / -n = **Japaner**

が見られるが、**Japanese** の左肩には「今日まれになった語句・意味」を示す記号▽が付されている。

『孝和袖珍字書』では、**japanesisch** が書名の他に、ドイツ語序文の中に二度現れ (eines "deutsch=japanesischen Wörterbuches", der japanesischen Schrift)、辞書の部の先頭ページにも用いられている (**Deutsch und Japanesisch.**)。 (原文はいずれも亀の子文字)。

すでに見たように『袖珍字語訳囊』のドイツ語タイトルは"**DEUTSCH-JAPANISCHES TASCHENWORTERBUCH**"で、ここには **japanisch** が使われている。

また、『和譯獨逸辞典』には **DR. SCHIBA**—「一代の天才とうたわれた司馬凌海」<sup>5)</sup> である—によるドイツ語の序文が付されているが、その中には **japanisch** が三例見える。いずれも "deutsch-japanisch" の形である (an einem deutsch-japanischen Wörterbuche, eines deutsch-japanischen Wörterbuches, ein deutsch-japanisches Wörterbuch)。

したがって、明治5年当時には、その頻度はともかく、**japanesisch** と **japanisch** のどちらも用いられていたことがわかるが、鈴木の記事「**japanisch** を当時 **japanesisch** とも言っていた」(87頁)に付け加えるべきものはない。

### 4. 東京は Tokei

『孝和袖珍字書』の和文のタイトルページを見ると「東京 學半社蔵」とあるにも拘わらず、迂闊にもドイツ文のタイトルページに現れる **Tokei** がすぐには **Tokyo** と結びつかなかった。

『日本史年表第四版』によると、江戸が東京と改称されたのは、陰暦の1868年7月17日のことである<sup>6)</sup>。『日本国語大辞典』には、「東京とうけい」は「東京(とうきょう)の古称。明治初期・中期に用いた」とある。

『孝和袖珍字書』と『和譯獨逸辞典』の刊行は明治5(1872)年で、これは明治初期にあたる可言えよう。**Tokei** はローマ字で書かれたが故に、東京が「とうけい」と呼ばれていたことを示す証拠でもある。

『和譯獨逸辞典』では、タイトルページに **TOKEI** が見えるのに加え、司馬凌海による序文の

末尾に記されているのもまた *Токеи* である。"*Tokei, im Herbst / funftes (ママ) Jahr Meidchi. / (1872.) / DR. SCHIBA.*"

##### 5. 『孝和袖珍字書』『和譯獨逸辞典』の編者、出版元など

まず『孝和袖珍字書』である。

タイトルページに記された編者 "S. Oda, S. Fudjii, Iu. Sakurai" は、小田條次郎、藤井三郎、櫻井勇作で、筆頭の小田は、「開成所人名録」(慶応二年六月十五日改)に「獨逸學世話心得 小田條次郎」と出ている当人とみられている<sup>7)</sup>。

"Kurata Buchdruckerei"「蔵田印刷所」とは、幕末から明治の初めに英学書を出版した蔵田屋清右衛門のことで、鈴木によれば「ドイツ文字の活字は、オランダ政府献上のものを文部省から借用したのではないかと想像される」とのことである<sup>8)</sup>。

同書の出版元は、巻末に「書肆／東京」と二行に書かれた下に、右から順に「日本橋元四日市／長岡屋新助」「神田柳原／高木和助」「日本橋通十軒店／鈴木喜右衛門」とある。

独文の序の次に3頁の「*Erklärung der Abkürzungen / 略語之表*」があるが、この表では、亀の子文字 (*Fraktur*) のドイツ語とこれに対応するラテン文字の英語が併記されている。(表 1 参照)

この表から品詞などの用語を抜き出すと次の通りである。ここでは便宜上、亀の子文字を斜体で示すことにする。

- a. = adjective, *Beiwort*. 形容辞
- ad. = adverb, *Umstandswort*. 副辞
- art. = article, *Geschlechtswort*. 冠辞
- c. = conjunctuon, *Bindewort*. 接続辞
- f. = feminine gender, *weibliches Hauptwort*. 女性名辞
- i. = interjection, *Empfindungs-, Ausrufswort*. 嘆息辞
- m. = masculine gender, *männliches Hauptwort*. 男性名辞
- n. = neuter gender, *sächliches Hauptwort*. 中性名辞
- p. = participle, *Mittelwort*. 分辞
- pl. = plural number, *Mehrzahl*. 複数
- pn. = pronoun, *Fürwort*. 代名辞
- pr. = proposition, *Vorwort*. 前置辞
- v. a. = verb active, *transitives Zeitwort*. 他動辞
- v. imp. = verb impersonal, *unpersönliches Zeitwort*. 非人動辞
- v. n. = verb neuter, *intransitives Zeitwort*. 自動辞
- v. r. = verb reflective, *rückbezügliches Zeitwort*. 再帰動辞

これらは、「嘆息辞」と「非人動辞」を別にすれば、末尾の「辞」を「詞」に入れ替えるとそのまま現行の文法用語となる。

次に『和譯獨逸辞典』について。

独文タイトルページに見える発行所 "VERLAG VON KWANKORIO" の KWANKORIO は「勸工寮」で、「長崎の活版伝習所で活版の技術を習得した者が、一部分製鉄所と共に文部省に附属し、のち東京に移って勸工寮活版所となった」とのことである<sup>9)</sup>。

編者は、巻末の跋文(日本文)によると河村之昌、澤田勝伯、明石文、明石朝幹の四人であるが、司馬凌海の序文では "A. Akaschi, T. Akaschi und U. Kawamura" で何故か澤田の名が漏れている。

この辞典では、見出し語はラテン字体の横書きで、語義の日本語の方は「Universität, f. 大学」の如く縦書きを横に90度倒した形である。(図5参照)

巻末に「略語表」が付いている。試しに前述の『孝和袖珍字書』の文法用語と比べてみると、こちらには「辞」ではなく「詞」が使われているが、「複称」、「前詞」、「能動詞」、「無人動詞」、「中性動詞」、「復帰動詞」など見慣れないものもある。

- a. 形様(ママ) 詞、 ad. 副詞、 art. 冠詞、 conj. 接続詞、 f. 女性名詞、  
int. 感働(ママ) 詞、 m. 男性名詞、 n. 中性名詞、 num. 数詞、 pl. 複称、  
prep. 前詞、 pron. 代名詞、 va. 能動詞、 vimp. 無人動詞、 vn. 中性動詞、  
vr. 復帰働(ママ) 詞

「中性動詞」は、ここでは「自動詞」と同義であろう。

ところで、中性動詞についてだが、『研究社新英和大辞典第4版』の見出し語 "v. n." の項には、文法用語としてこの語が出ている: 「v. n. 《略》 verb neuter [文法] 中性動詞, 自動詞」。また、中性動詞は『言語学大辞典』(三省堂)の見出し語にもなっているが、その項目の冒頭に「ミクロネシア諸語の動詞のタイプの一つ」<sup>10)</sup>と記されている。従って、『和譯獨逸辞典』でいうところの「中性動詞」との関連はまず無いと思われる。

## 6. 訳語と語義について

『孝和袖珍字書』が出版された明治5年といえば、9月に新橋・横浜間に鉄道が開業している。また前年の明治4年には郵便事業が創業され、翌5年には郵便制度が全国的に実施されている<sup>11)</sup>。

西洋のドイツにはあっても、その頃までの日本には存在しなかった技術や制度に、この辞書がどんな訳語あるいは語義を与えているか、鉄道と郵便について幾つか具体的に見ておこう。

まずは鉄道である。

鉄道は「Eisenbahn, f テツダウ鉄道」であり、これに関連する施設、車両などは次のように記されている。右に示すのは、現代の独和辞典に一般的に見られる訳語である。

Bahnhof, m. ヤクシヨ (同上 [= 鐵道] ノ)	駅, 停車場; 駅舎
Bahnwärter, m. テツダウノバンニン (車ヲ送迎スル為ノ)	線路巡回員, 軌道係; 踏切警手
Eisenbahnwagen, m. オカジョウキ火輪車	鉄道車両
Lokomotive, f. ジヤウキシヤ蒸氣車	機関車
Tender, m. アンナイブ子導船。蒸氣車ノ水石炭ヲ入レ置クモノ [鐵道] 炭水車 [海語] (石炭・水・食糧などの) 補給船	

次に郵便関係である。現代の独和辞典のひとつ『新アポロン独和辞典』同学社、2007年第8版1刷一でPostを引くと、

「①郵便[制度] ②郵便局 (= Postamt) ③郵便[物], 手紙, 便り ④ (昔の:) 郵便馬車」のように記されている。

『孝和袖珍字書』では、この "Post, n." に「シメダカ総計。ヒキヤクヤ飛脚屋。タヨリ便」の訳語を当てている。Postのつく語においては、Postがほぼ「飛脚」と訳されている。

Postamt, n. ヒキヤク役所	Postkutsche, f. ヒキヤク車
--------------------	-----------------------



図1 『字和袖珍字書』タイトルページ

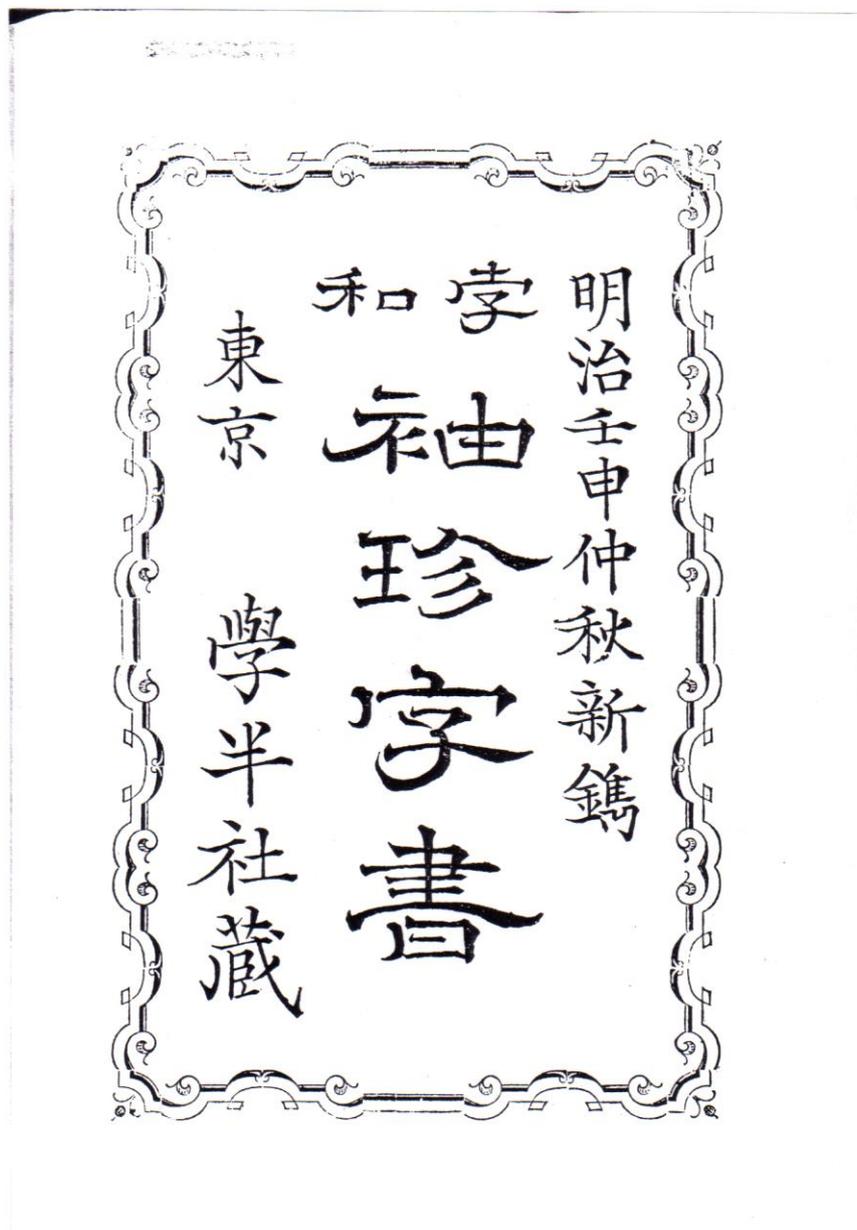


図 2 『孝和袖珍字書』 ドイツ語タイトルページ

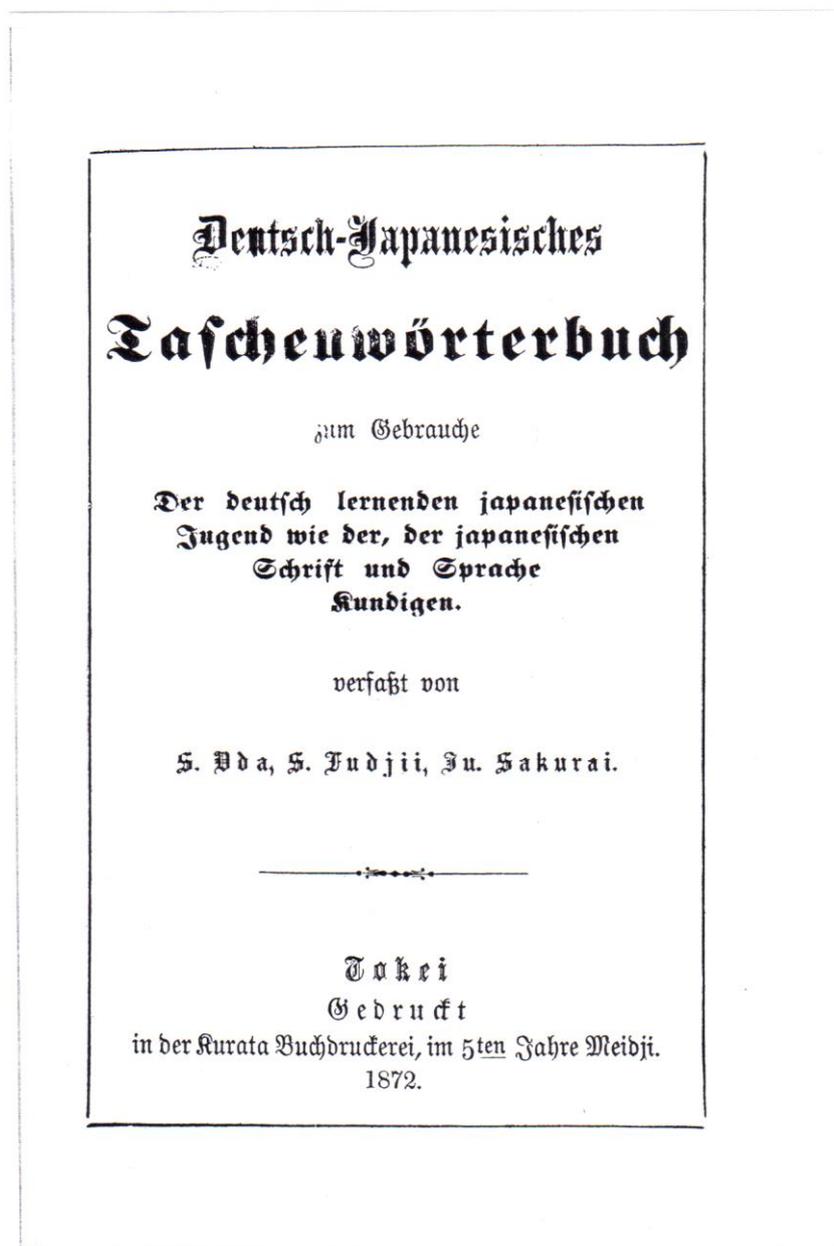


図3 『和譯獨逸辞典』タイトルページ

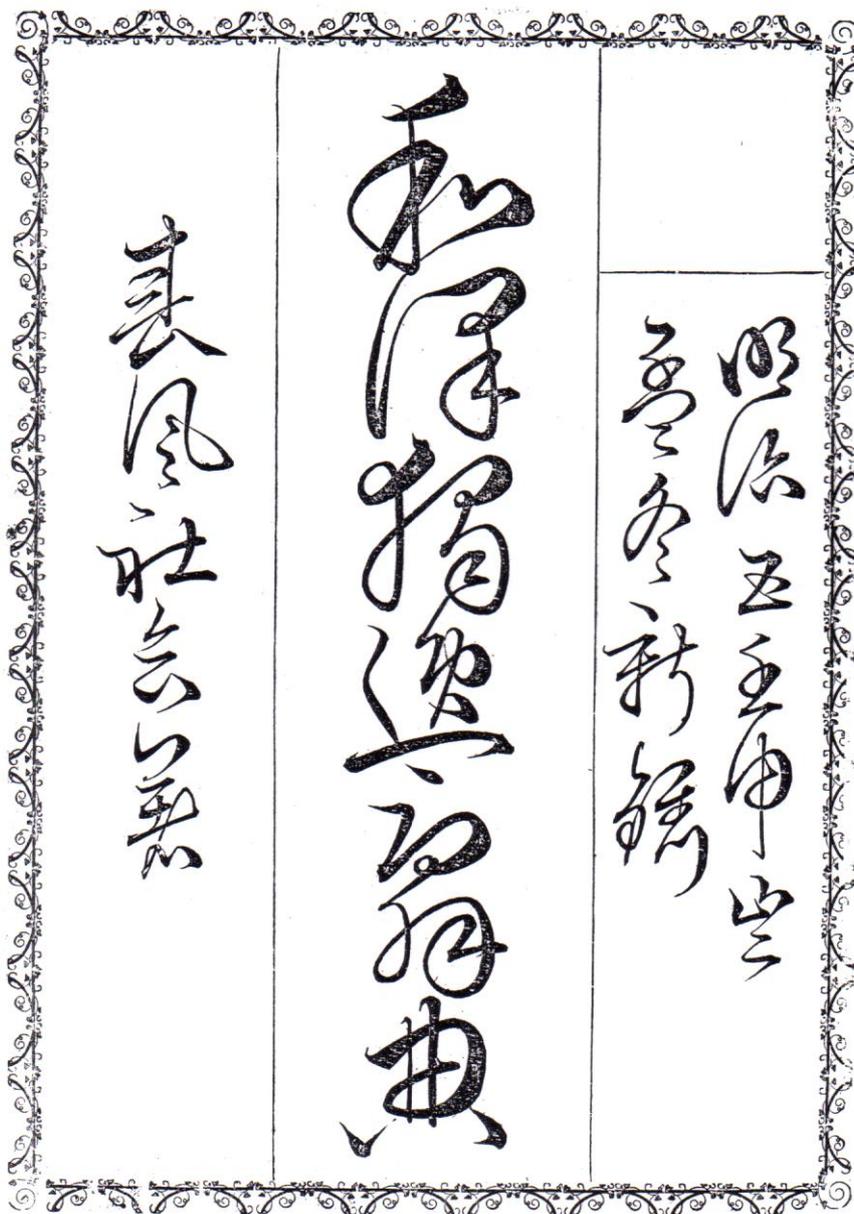


図 4 『和譯獨逸辞典』ドイツ語タイトルページ



図 5 『和譯獨逸辞典』 辞典本文の先頭頁

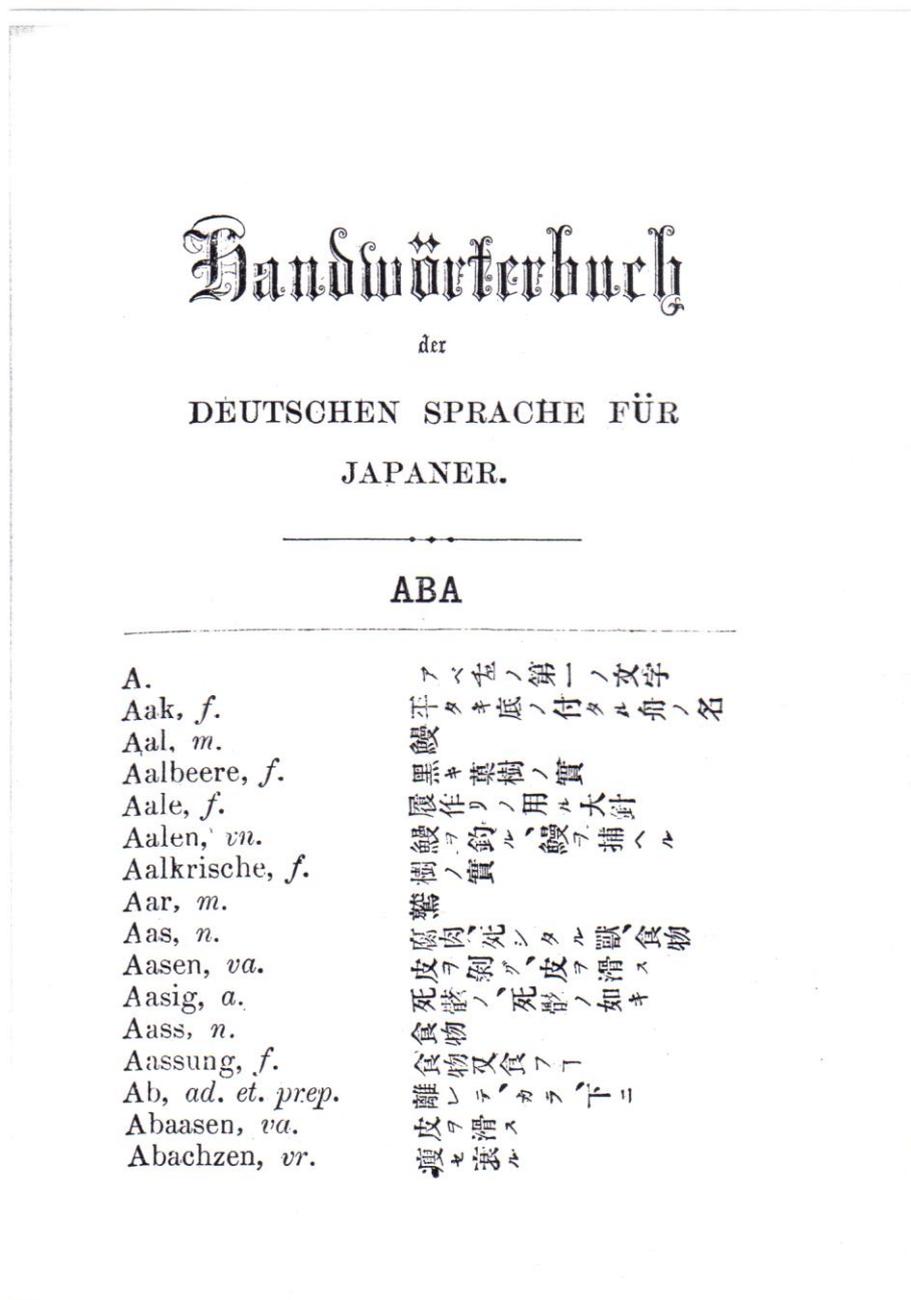


表 1 『李和袖珍字書』の「Erklärung der Abkürzungen. / 略語之表」

注：便宜上、ドイツ語の亀の子文字はラテン文字の斜体に、漢字は新字体に変えてある。

a. = adjective, <i>Beiwort.</i>	形容辞
ad. = adverb, <i>Umstandswort.</i>	副辞
am. = Americanism, <i>amerikanischer Ausdruck.</i>	亜墨利加語
ar. = arithmetic, <i>Rechenkunst.</i>	算術ノ語
art. = article, <i>Geschlechtswort.</i>	冠辞
bibl. = biblically, <i>Bibelausdruck.</i>	経典ノ語
c. = conjunction, <i>Bindewort.</i>	接続辞
cant. = cant term, <i>Zunft=oder Gaunerausdruck.</i>	賞美ノ詞
chem. = chemistry, <i>Chemie.</i>	分析家ノ語
com. = commerce, <i>Handel.</i>	商法ノ語
f. = feminine gender, <i>weibliches Hauptwort.</i>	女性名辞
fam. = familiarly, <i>vertraulich.</i>	親族間ノ語
fig. = figuratively, <i>bildlich.</i>	譬ノ語
gr. = grammar, <i>Sprachlehre.</i>	文法家ノ語
i. = interjection, <i>Empfindungs-, Ausrufswort.</i>	嘆息辞
law. = law term, <i>juristischer Ausdruck.</i>	法律語
m. = masculine gender, <i>männliches Hauptwort.</i>	男性名辞
mar. = marine, <i>Seemannsausdruck.</i>	航海家ノ語
med. = medicine, <i>ärztlicher Ausdruck.</i>	医家ノ語
mil. = military term, <i>Kriegs=oder Soldatenausdruck.</i>	兵家ノ語
mus. = music, <i>Musik.</i>	音楽ノ語
n. = neuter gender, <i>sächliches Hauptwort.</i>	中性名辞
opt. = optics, <i>Lichtlehre.</i>	視術家ノ語
p. = participle, <i>Mittelwort.</i>	分辞
phot. = photography, <i>Photographie.</i>	写真家ノ語
pl. = plural number, <i>Mehrzahl.</i>	複数
pn. = pronoun, <i>Fürwort.</i>	代名辞
poet. = poetically, <i>dichterisch.</i>	詩学家ノ語
pr. = proposition, <i>Vorwort.</i>	前置辞
s. = substantive, <i>Hauptwort.</i>	実名辞
v.a. = verb active, <i>transitives Zeitwort.</i>	他動辞
v. def. = verb defective, <i>unvollständiges Zeitwort.</i>	不充分動辞
v. imp. = verb impersonal, <i>unpersönliches Zeitwort.</i>	非人動辞
v. n. = verb neuter, <i>intransitives Zeitwort.</i>	自動辞
v. r. & ir. = verb regular and irregular, <i>regelmäßiges und unregelmäßiges Zeitwort.</i>	規則及不規則動辞
v. r. = verb reflective, <i>rückbezügliches Zeitwort.</i>	再帰動辞
vulg. = vulgar(ly), <i>gemeiner Ausdruck.</i>	平話

## 注

- 1) タイトルの崩し字の読み方は、鈴木重貞『ドイツ語の伝来—日本独逸学史研究—』(92頁)に従っている。同書によれば、『和譯獨逸辞典』は、「和譯」の「譯」の崩し字が「洋」のようにも見えることから、「和洋独逸辞典」と誤って呼ばれたこともあるとのことである。本書の詳細は、末尾の「参考文献・資料」を参照。
- 2) 田中梅吉『日独言語文化交流史』517頁。本書の詳細は、末尾の「参考文献・資料」を参照。
- 3) 鈴木(前掲書91-92頁)によれば、この辞書の序文の終わりに「壬申秋九月 火州後学」とあるので、「発行年月は従って明治五年九月と見て差支えあるまい」とのことである。なお、火州後学とは「編著者の雅号で、本名は山本松次郎(弘化2年—明治35年)という蘭・仏語学者である」(田中前掲書、516頁)。
- 4) 信岡資生「辞書の大きさ(1) —袖珍(しゅうちん)辞書—」『クラウン独和辞典—編集こぼれ話—』2010年4月26日<『DICTIONARIES & BEYOND / WORD-WISE WEB /三省堂辞書ウェブ編集部による ことばの壺』
- 5) 鈴木前掲書、93頁。  
『日本人名大事典(新撰大人名辞典)』によると、司馬凌海(1839-1879)は、「幕末、明治初期の医家にして語学者」である。長崎で蘭医ポンペに就いて蘭医学を4年修めてもいる。『和譯獨逸辞典』のタイトルページに見える「春風社」は、凌海が開いて洋学を講じた私塾である。凌海は、「磊落不羈の性格で、語学の才に秀で、六外国語に通じ、最も独、英、蘭語に堪能であった」とのことである。なお、引用文では旧字体を新字体に代えている。  
『コンサイス日本人名辞典』は、「司馬凌海」の項の末尾に、司馬の著書として<著「七新薬」、  
「索和袖珍字書(独和辞典)」1872>のように記しているが、後者に関しては二重の誤りがある。書名は「李和袖珍字書」であるし、司馬が関わったのは「和譯獨逸辞典」である。
- 6) 同書の凡例には「1872年(明治5年)12月3日の改暦より以前は、日本史の事項については陰暦の年月日を使用」とある。
- 7) 鈴木前掲書90頁、田中前掲書522頁。
- 8) 鈴木前掲書89-90頁。
- 9) 鈴木前掲書96頁。
- 10) 『言語学大辞典 第6巻 術語編』<中性動詞>の項。
- 11) 日本郵政ホームページの「歴史>出来事で振り返る:1871年から1890年」による。これによると「郵便役所・郵便取扱所を郵便局と改称」したのは1875(明治8)年のことである。因みに、「逓信省創設」は明治18(1885)年、「逓信省のマークとして『〒』を制定」したのは1887(明治20)年である。
- 12) 『岩波哲学・思想事典』の「哲学」の項には、次のように記されている。  
「哲学の語は、明治7年(1874)に著された『百一新論』のなかで、西周(にしあまね)が西洋語のフィロソフィの訳語として新たに造語した言葉である」
- 13) 『大辞林 第三版』の「セイミ」の項に、[「舎密」とも当てた]とある。  
『講談社オランダ語辞典』によると chemie の発音は[xe'mi]である。ここでは、アクセント記号を「'」で、半長音符号を「˘」で代用している。

## 参考文献・資料

- 石田勇治編著『図説ドイツの歴史』河出書房新社、2010年3刷
- 鈴木重貞『ドイツ語の伝来—日本独逸学史研究—』(比較文学研究叢書②)教育出版センター、昭和50年(1975年)
- 田中梅吉『日独言語文化交流史』三修社、2006年  
同書は『総合詳説 日獨言語文化交流史大年表』1983年第4版の[POD版]である。
- 信岡資生「辞書の大きさ(1) —袖珍(しゅうちん)辞書—」『クラウン独和辞典—編集こぼれ話—』2010年4月26日 <『DICTIONARIES & BEYOND / WORD-WISE WEB /三省堂辞書ウェブ編集部による ことばの壺』
- 宮永孝『日独文化人物交流史 ドイツ語事始め』三修社、1993年
- 宮永孝『日本洋学史—葡・羅・蘭・英・独・仏・露語の受容』三修社、2004年  
『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年第1刷  
『学研 漢和大辞典』藤堂明保編、学習研究社、昭和54(1979)年第5刷  
『研究社 新英和大辞典第4版』研究社、1979年第4版第65刷  
『言語学小辞典』下宮忠雄・川島淳夫・日置孝次郎編著、同学社、1988年再版  
『言語学大辞典 第6巻 術語編』三省堂、1996年  
『広辞苑 第四版』新村出編、岩波書店、1997年第4版第6刷  
『講談社オランダ語辞典』監修:P.G.J. van Sterkenburg / W.J. Boot / 財団法人日蘭学会、講談社、1994年第2刷  
『国語学大事典』国語学会編、東京堂出版、平成11(1999)年10版  
『コンサイス日本人名事典』<改訂新版・机上版>三省堂編修所編、1994年  
『世界史年表 第二版』歴史学研究会編、岩波書店、2001年  
『大辞林 第三版』松村明・三省堂編集所編、三省堂、2006年  
『大日本百科事典ジャポニカ』第15巻、小学館、1980年  
『哲学事典』平凡社、1992年初版第23刷  
『日本史年表 第四版』歴史学研究会編、岩波書店、2001年  
『日本人名大事典(新撰大人名辞典)』第三巻、第五巻、平凡社、1979年覆刻版第一刷  
『「日本におけるドイツ語文化回顧展」カタログ』郁文堂、1990年  
『平凡社大百科事典』第10巻、平凡社、1985年
- Länderbericht Japan: Geographie, Geschichte, Politik, Wirtschaft, Gesellschaft, Kultur.  
Hrsg. von Hans Jürgen Mayer und Manfred Pohl. Darmstadt: Wissenschaftliche  
Buchgesellschaft, 1995.
- 日本郵政ホームページ (<https://www.japanpost.jp>)